

セッション2:「和解と共存に向けて」

講義4:「和解と共存に向けてー南アフリカの事例からー」

講師:大阪大学大学院人間科学研究科 助教授 峯陽一氏

今日は、「和解と共存に向けて」ということで、南アフリカのことをお話しようと思います。さらに関心がある方のために、私が5年ほど前に書いた南アフリカの新体制についての論文をお配りしてあります。

現代世界の暴力的衝突の大部分は、国家間の戦争ではなくて、非国家アクター間の内戦であったり、ないしは国家セクターの人権侵害であったりします。大国の利害も深くかかわっていますが、そこには地域に固有の歴史的背景があります。従って、紛争の勃発を防ぎ、解決のため行動する外部のアクターは、地域の特性を十分に考慮し努力する必要があります。

私は、もともと文学部で歴史を研究しておりまして、それから開発経済学、政治学、国際関係論というふうに研究者としての所属先がころころ変わっています。無節操と言えば無節操ですが、やはり私が一番じっくりするのはアフリカの地域研究です。地域研究というのは、経済学、文学、歴史学、社会学、人類学、政治学、法学と、いろいろな分野を素材として使いながら、地域のリアリティーをまるごと理解することだと思います。国際政治学とか国際関係論といった分野は、どちらかと言えば「上」からの視点で、人々に平和と安心と安全を保証するような制度的な枠組みを作っていこうというところに一番大きな強みがあり、そういう点で大切な学問だと思います。他方、地域研究は、まずは「下」からの視点です。地域研究者は村をはいずりまわったり、地域の言葉を覚えたり、地域の歴史をちまちま調べたりしながら、現場のリアリティーに沿って、学んでいくものだと思います。ただ、この二つに接点がなければおもしろくないということで、今回、私は南アフリカを取り上げながら、南アフリカでの経験が他の地域の鏡として、一体どういうふうに使えるか、そのために普遍化できることはないか、といった問題意識で話をしようと思います。

南アフリカといいますと、アパルトヘイト、人種差別の国として教科書的にはよく知られている国であると思います。人口は4000万人ぐらい、面積は日本の3倍ぐらいのとても広大な国です。自然のとてもきれいなところで、ネーチャーリザーブもたくさんあります。私が暮らしていたケープタウンという街は、一度行った人は忘れられないくらい素晴らしい景観と文化を誇っており、オリンピックの候補地にもなっています。黒人であれ白人であれ、南アフリカの人はこの南アフリカという国、国土、自然、風土をとっても愛している人達ですが、ここは、一方で人類史において他に例がないほどの人種差別で世界中に知られた国でもあります。

もともとの起源をたどりますと、1652年にヤン・ファン・リーベックというオランダ東インド会社の外科医が今のケープタウンに植民地、コロニーを作ったのが最初です。実は、日本とも深い関係があり、このリーベックという人は南アフリカに植民地の拠点を作る前に長崎の出島に二回ほど来たことがあります。彼自身は東洋貿易の利益というものをとても敏感に感じ取って、オランダ海上帝国の貿易の拠点、中継地としてこのケープタウンに入植地を作ったという経緯があります。人の移動もあったようで、記録を見ますと、当時の白人入植者の中に、なんとかファン・ヤーパンという人もいたようで、おそらく日本から17世紀にケープタウンに渡った人だろうと思います。そういう海上貿易の拠点として、このケープタウンにオランダ系の人々が入植したのが、人種対立の始まりです。しかし、その海上貿易もやがて支配者が交代し、19世紀にはイギリス人が入植しました。そして、19世紀の後半にはダイヤモンドや金の採掘が始まりました。ダイヤモンドといいますと、デビアスという世界最大のダイヤモンド会社がありますが、このデビアスが産声をあげたのも南アフリカで、今でも名目上本社は南アフリカにあると思います。金やダイヤモンドその他の希少金属が南アフリカには眠っておりまして、オランダに代わって南アフリカを支配したイギリスにとって、ここはいろいろな意味で戦略的に重要な地域になっていきました。

現在でも、南アフリカの白人というと、オランダ系の方々が6割、そして英語を話す人々が4割、だいたいそういう人種構成になっています。19世紀の終わりにはいわゆるボーア戦争、白人同士の戦争が起きました。これは2頭のライオンが1頭の獲物を狙ってたたかった戦争だと言われることがあ

ります。つまりダイヤや金といった鉱物資源、そしてそれを掘り出す安い黒人の労働力をめぐってイギリス系とオランダ系の人々が死闘を演じたという構図であります。それから百年が経った今でも、南アフリカの白人たちはなかなか交わりません。私はステレンボッシュ大学というところで、しばらくアジア経済などを教えていたのですが、生活に余裕があってこの大学に来る学生というのは、白人の学生が多いのです。教室では、奨学金をもらった黒人学生が、帽子を深めにかぶってうしろ斜めのほうにちらほらちらほらと座っていました。白人学生同士も、よく見ていると完全に二つのグループに分かれていて、出席をとったりすると大体名前が分かってくるのですが、今でもオランダ系とイギリス系とはきれいに分かれて座って、お互いそれぞれの言葉を喋っており、お互いに打ち解けあっている構図がほとんど見られません。黒人と白人だけではなくて、白人の集団の中でも大きな亀裂があるのが南アフリカの社会です。

しかし、そのオランダ系とイギリス系の人々が、黒人を排除する形で結びついて、アパルトヘイトという厳格な人種隔離が完成しました。1949年の白人だけの選挙で国民党が政権を握り、その下で20世紀の後半にアパルトヘイト体制がしっかりと形を作っていたのですが、それは人口の15%に満たない白人が国土の87%の土地を独占する、こういう体制でありました。南アフリカのアパルトヘイトには2種類があり、一つはペティアパルトヘイト、小さいアパルトヘイト、もう一つはグランドアパルトヘイト、大アパルトヘイトです。ペティアパルトヘイトというのは非常に目に付きやすい人種差別です。例えば、公園が黒人と白人で分かれている、映画館も、海水浴場も、公共交通機関も、学校も、病院も分かれています。こういう目に付きやすい白人と黒人の隔離が小アパルトヘイトです。グランドアパルトヘイトというのは、広大な南アフリカの大地を白人と黒人の土地に分割してしまうというものです。白人の土地には鉱物資源が眠っており、農業が盛んな土地であり、辺境の荒れ果てた土地は黒人の土地というように、白人が全体の土地の87%を支配し、黒人が13%を所有する、これが大アパルトヘイト、土地の分割です。黒人たちはホームランドと呼ばれた自分たちの土地に閉じ込められて、白人の土地に出稼ぎに行くのですが、自分たちの大地である南アフリカで生まれ育ったにもかかわらず、黒人はまるで外国人として、パスと呼ばれる身分証明書の携帯が義務付けられました。そこには黒人たちの顔写真、納税歴、犯罪歴、現在の雇用主とか現在の居住地、それから指紋と、個人情報が記載されており、常に携帯が義務付けられていました。1960年のシャープヴィルの虐殺という事件では70人以上が殺されたのですが、これは黒人たちが自発的に警察署の前に集まって自分たちのバスを焼いたことがきっかけです。自分たちはパスで管理されるのはごめんだ、ということで、決して暴力的なプロテストではなかったのですが、ほとんどの人々が背後から撃たれ一瞬のうちに射殺されたという事件が起きています。南アフリカではマラソンも盛んなのですが、ある黒人の選手が国内の大会でマラソンをする際にもパスをぶら下げていなければならないという指示を受けて、裁判になったことがあります。走りながら逃げてしまうかもしれないというというのがその理由なのですが、そうやって、常にパスの携帯を義務付けられていました。白人地域に暮らす黒人達には、参政権がない、選挙権もない、職業選択の自由もないし、土地の所有権もないという暮らしを余儀なくされていたわけですね。

黒人達の中には、1割くらいですが、インド系の人々や混血の人々も含まれています。あのマハトマ・ガンディー、つまりインドを独立に導いたモハンダス・ガンディーも20年ほど南アフリカで暮らしていました。ガンディーは南アフリカで暮らし、そこでの反人種差別運動の活動経験を生かして、祖国を独立に導いたのです。黒人達はやられっぱなしではなく、1912年にANC(アフリカ民族会議)といわれる組織を結成します。これはアフリカ大陸では現存する一番古い民族解放運動ですが、60年代には亡命・地下活動を余儀なくされます。最高指導者がネルソンマンデラ氏で、『自由への長い道のり』という彼の長大な自伝がNHK出版から出版されています。とても面白い本ですが、彼は逮捕され拘束され27年にわたって獄中生活を余儀なくされていました。60年代から70年代にはステューブ・ビコという指導者が活躍しました。「遠い夜明け」という映画でご存知かもしれませんが、黒人が抑圧されているのは何故かという、これは心の問題だというのが、ビコのメッセージです。つまり、パスとか警察とか、物質的な抑圧が問題ではない、黒人達が、生まれながらに自分は白人と比べたら劣っているという劣等感を心の中に刻み付けてしまう、挑戦的なことは何もやろうとしない、最初か

ら自分達は負けているのだと思い込んでしまう、そういう心の態度が黒人の隷属の最大の問題だというメッセージです。自分たちの黒い肌と、それから自分達の文化に誇りを持って生きていこうじゃないかという意識革命の呼びかけが、最も重要なメッセージだったわけです。その映画の中でもリアルに描かれていますが、ビコは獄中で殺されました。

しかし、この意識革命の大義を引き継いだ若者たちが 1976 年にソウエトで立ち上がり、南アフリカの国内運動、そして国連を含む国際社会による経済制裁が広がって、1990 年に国民党はアパルトヘイトの撤廃を宣言したわけです。実はその頃、私自身は 20 代の後半でしたが、南アフリカの人種差別の撤廃を求める NGO で活動していました。NGO という言葉はまだあまり使われていなかった時代ですが、ピラをまいたり、南アフリカの状況に対する世論の意識を喚起させるいろいろな活動を学生時代にやっていました。そういうことつながりから、当時は反アパルトヘイト活動の盛り上がりを実感しました。80 年代に特に運動が盛り上がったのはアメリカ合衆国で、レーガン大統領の拒否権を覆して包括的反アパルトヘイト法という法律が制定されました。一番効果的だったのは経済制裁、そして投資をしている先進国の企業がどんどん引き上げ始めたことで、これが政策転換を促す強烈な力になった。国連加盟国に対して、武器禁輸をはじめとする制裁が本格的におこなわれたのは、南アフリカが初めてのケースだったと思います。

私の問題提起の本題は、この次の動きです。南アフリカ政府によるアパルトヘイトの撤廃を世界中が歓迎します。その後、人種差別のない社会をどのように構想すればいいのか、これが次の課題になるわけです。新憲法の内容について話し合っていくのですが、このプロセスが実は大変でした。黒人たちは、白人は既得権を残して支配を続けようとするはずだと考えて、警戒しました。白人たちは黒人の復讐を受けることを恐れました。白人にも黒人にも自分たちのエスニックグループの利益を守ろうとする人々が現れました。とりわけ、オランダ系の白人であるアフリカーナは、日本でいえば徳川時代が始まったばかりの 17 世紀から南アフリカで暮らしていて、今さらヨーロッパには帰る家がありません。自分達こそ真のアフリカ人だと主張するアフリカーナ。他方でズールー人は、南アフリカの黒人の中でも最大規模の民族集団であり、多数派支配のもとで自決権を奪われることを恐れました。アフリカーナの極右勢力は爆弾テロや暗殺を繰り返し、ズールー民族主義者が率いる IFP と ANC の対立は局地的には内戦に近い状態になりました。

クリス・ハニというアフリカ共産党書記長がいました。当時の世論調査ではネルソン・マンデラに次いで人気が高かった人で、エリートの共産党書記長というよりも、常に黒人の若者を率いて、ゲリラ戦争の時には常に最先頭で敵地に赴いた人です。黒人にとっては絶対に信頼できる兄貴分であり、一方では、大学では英文学を専攻し、戦場にはいつもシェイクスピア選集を携えて行ったことで有名です。語学力もすごくて、南アフリカの地元で使われる言葉に加え、ポルトガル語、フランス語、ロシア語、さらにギリシャ語からラテン語まで理解するという、猛烈な知識人でもあった。このハニがテレビに登場すると白人の住民達もびっくりするわけです。共産主義の化け物だと思っていたら、心を惹きつける笑顔。しかし、1993 年に、彼は右翼の放った凶弾に倒れる。VIP だったのに、彼はあえてガードマンをつけていなかった。いつもの店に新聞を買いに行った帰りに、自宅の前で射殺されました。このハニの暗殺で南アフリカの黒人達は、だまっていられない。このままだとゼネスト状態になり、黒人も武器をとる。白人も武器をとる。このままだとユーゴスラビアと同じような状態になってしまい、出口の見えない内戦に突入してしまう。当時の南アフリカは、こういう危機感でいっぱいだったわけです。

結果的には、ハニの暗殺がきっかけになって、全ての政党が新しい憲法に合意をして、翌 94 年には黒人も白人も参加する選挙が実施されました。これは本当に感動的な選挙でした。私も見に行きました。94 年の 4 月、朝 5 時に飛行機で着きました。その時に入国管理官に「あんたラッキーだったね」と言われました。どういう意味か分からなかったのですが、入国手続きが終わって空港の到着ロビーに出た時に分かりました。もう全部めっちゃくちゃで、立ち入り禁止のテープが張られていて、飛行機の中では分からなかったのですが、およそ 24 時間前に爆弾テロが起きていたのです。幸い死者は出なかったが、空港の職員を含めて重傷者がたくさん出る最後の爆弾テロでした。しかし、空港を出て街中の投票所を見に行くと、延々と何キロも行列が続いて、人々が投票を待っている。これま

では白人だけの選挙だった。しかし今回は、白人のマダムと黒人のメイドさん、白人の家族と黒人の家族とがお互いにまだらみたいに行列をつくって投票を待っている。そういう時にマダムとメイドはどういう会話を交わしながら投票を待っていたのでしょうか。とにかく、史上初めての全国民参加の選挙を経て、94年に南アフリカはすっかり変わった。次に、この新体制の中身のお話をしておきたいと思います。

選挙を経て、国民統合政府(Government of National Unity)が誕生しました。対立していたいろいろな集団の合意が成立したのですが、合意ができた大きな理由は、白人の側も黒人の側も納得できる新体制の青写真が成立していたということです。その青写真というのが、国民統合政府でした。憎悪の時代から和解の時代に入っていき南アフリカの新しい政治体制として、白人も黒人も含めて最大多数の南アフリカ人の新体制への希望を配慮して、すべてを受け入れられるような、そういう政治制度が成立したわけです。国民統合政府の特徴を、ここで3つにまとめてみましょう。

一つは比例代表制です。これまでの南アの白人だけの選挙はすべて小選挙区制に基づくものでした。ところが新体制の下で、もし小選挙区制で新たに選挙区割りをするとしたら、白人居住区と黒人居住区が統合されることとなります。というのは、白人が住んでいるところには必ず黒人の労働者がいるのです。白人住宅地には必ず黒人のメイドがいる。白人のプール付きの豪邸が並ぶ住宅地があると、必ずその近くに黒人だけの掘っ立て小屋が並ぶ居住区があるのです。小選挙区制を採用して、この二つの居住区が統合されてしまうとどうなるかというと、数に勝る黒人達が自分達の代表に投票する。そうすると白人の有権者の票がほぼすべて死票になってしまう。少数派である白人の意思を代弁するような政治家は国会議員になれない、こういうことになるわけですね。白人の議席はほとんど消滅するだろう。黒人のエスニックな勢力が拮抗しているところでも、問題が起きます。クワズールー・ナタール州のように ANC とズールー民族主義者の勢力が均衡しているところでは、一議席を争う選挙運動はすぐさま暴力的な対立にエスカレートしてしまいます。

ここで合意されたのが比例代表制です。すべての人種集団、エスニック集団は少なくとも人口に比例する代表を国政に送り込めることになった。これは大きなポイントだと思います。よく国連の選挙監視などで、選挙に不正がなかったか、つまり、集計が公正だったか、運動員による脅迫行為がなかったか、といったことで選挙の公正さが問われますが、そのような面で公正な選挙だったとしても、選挙制度の中身を見ておく必要があると思うのです。仮に完全に公正な選挙がおこなわれていたとしても、小選挙区制を採用することで、例えば国民の3割や4割の意見を代表している政党が、ほとんど議席を得られないというようなことも場合によっては起こり得るわけです。そのような政治勢力はインフォーマル化して、体制そのものを覆そうとするかもしれません。複合的、多元的な社会において、小選挙区制が有している潜在的な危険性を私達は認識しておく必要があると思います。

二つ目は連立政府です。新しい国民統合政府の下では、下院で最大の得票を得た政党が大統領に指名されますが、得票率が20%を超えた政党は副大統領を指名する権限を与えられます。さらに、5%を超えた政党は得票率に応じて閣僚を出す権利を与えられます。つまり5%以上の有権者に支持された政党というのはすべて連立与党になるということです。資料には、一回目の総選挙での政党別の得票率、ANC とアパルトヘイト時代の与党の国民党、それからズールー民族主義政党のインカダ自由党、自由戦線、アフリカーナの右翼政党、これらの主な政党の得票率と国会での議席配分が出ています。閣僚の2割は国民党、1割は IFP に割り当てられました。国民党の党首のデクラーク前大統領が副大統領に就任し、ANC のマンデラが大統領に就任する。そうやって、旧来の敵同士が大連立を形成し、新生南アフリカの顔を分かち合うなどということは、数年前には誰も想像できなかった。旧体制の大統領が新体制の副大統領になることで、白人達も胸をなでおろしました。ズールー民族主義者も、IFP の代表が閣僚の1割を占め、内務大臣のような重要なポストにつくことでとりあえず満足した。ANC は6割の国会議員と閣僚の多数派、そして大統領を得ることで満足した。こういう連立政府の規定も南アフリカがソフトランディングできた大きな要因になっている。ちなみに、この連立は、今は解消されています。これは5年間の時限付きで、その後は自発的に連立したければいい、ということになっていました。インカタ自由党が最後まで連立に残っていましたが、3年前に、最後の閣僚だった人も南アフリカの内閣から離れました。この IFP で最後の閣僚、文化

大臣だった方が、現在、南アフリカ共和国大使として東京におられます。いずれにせよ、過渡期において対立する政治勢力をひとつにまとめるにあたって、この連立政府の規定はとて大きな役割を果たしました。

そして三つ目の特徴が地方分権です。南アフリカは 9 つの州に編成されることになり、連邦制とまではいきませんが、それぞれの州や大都市は予算の執行などで大きな権限が認められました。さらに南アフリカ国会の上院は各州の代表で構成されています。南アフリカでサッカーの世界カップが開かれますが、競技場は南アフリカの全土に分散させて実施されるようです。それぞれの州が、文化的、地理的、歴史的にも非常に多様な州です。日本の道州制構想との関連でも、おもしろいですね。ケープタウンからジョハネスバーグに行きますと、同じ南アフリカではなく、外国に来たみたいいな気分になります。地方分権というのも新体制の非常に大きな特徴だと思います。

新体制ができあがるまで、南アフリカはユーゴスラビア的な内戦に近い事態に陥るのではないかと、南ア人すべてが恐れていましたが、逆に、その恐怖感が大きな刺激になって交渉が進んでいきました。その交渉の果てに実現した国民統合政府は、南アフリカ人を構成するすべての集団に、集団としての権利を行使する余地を与えることで、その上部において国民的なまとまりをつくりだそうとするものだったと解釈しています。94 年の選挙では、選挙をボイコットしたごく少数の右翼勢力を除いて 100%に近い得票率が達成されました。こうして、新生南アフリカは、民主国家として堂々と国際社会に復帰することになったというわけです。

ここで紹介してきたのは、あくまで南アフリカの事例です。この国民統合政府のやり方にも限界があると思います。南アフリカのケースと同じようなことをやれば世界中の紛争が解決するということではもちろんない。各地域の個性があり、時代があり、いろいろな対立のパターンがあります。しかし、一つの青写真として、南アフリカの成功が世界に大きな影響力を与えているというのも事実です。例えば、スーダンでもとりあえず和平が成立しましたが、その新しい政府は南アフリカとまったく同じく国民統合政府、GNU と呼ばれていて、明らかに南アフリカを参考にした暫定政府を作っています。北アイルランド紛争の和解プロセスでも、南アフリカ型のパワーシェアリングが参考にされています。皆さんそれぞれが関心をもつ紛争地域を具体的に見ていった場合に、連立の形、選挙制度の形、分権の形とかについて、どれがどこまで南アフリカの事例と同じなのか、違うのか、何がどこまで有効なのか、どこがボトルネックになっているのか、こういう比較の素材を提供しているという意味で、南アフリカの経験は一つの問題提起になっていると思います。

最後に、真実和解委員会の話をしたいと思います。南アフリカの真実和解委員会(Truth and Reconciliation Commission)は法律で設置されました。これは、過去の清算のために政府が設置した独立機関です。アパルトヘイトは巨大な政治暴力の装置でした。街頭デモに参加した若者たちは無差別に銃撃され、収監されました。特に 80 年代に問題になったのは子供たちです。小学生や中学生も護送車に入れられて、監獄に入れられていたのが実態です。中学生で拷問されたような子もいます。非常に多かったのが行方不明です。ある日突然、自分の子供が消えた。どこに行ったか分からない。実際には、警察に拉致されて警察署の中で殺害されている。しかし、何の証拠も残っていない。事態を悪化させたのは、アパルトヘイト当局が黒人の内部に体制協力者を作り出したということです。反体制の情報をどんどん集めていったのです。そうすると、悲惨なことが起こります。ANC で活動地下活動をしている人たちも誰を信じていいのか分からなくなる。これまで、隣で自分達の同志だと思っていた人物が、実は、白人政府にお金で雇われたスパイだった。そうやって誰もが疑心暗鬼にかられ、無実の人が疑われ、黒人の解放運動の内部でも拷問が行われたりということが、特に 70 年代 80 年代に起こりました。

こうした過去に、新しい南アフリカはどう向き合ったらいいのだろうかということで、96 年に TRC が発足いたしました。議長はノーベル平和賞を受賞したレズモンド・ツツ主教です。TRC の活動領域は三つありました。

ひとつは真相究明です。TRC は全国津々浦々で、およそ 3 年にわたって公聴会を開いていきます。そこで、自分がこんな拷問を受けた、自分の子供がこういう形で拉致されて消えた、女性だったらレイプされた人もいるし、拷問のために車椅子生活を送っている人もいるし、こういう人たちが地元

の公会堂や教会に集まってきて、自分や家族、友人の受けた大きな傷について初めて公に語り出しました。自分たちの街や村の仲間たちがたくさん傍聴に来る、その様子は南アフリカの国営放送により全国に中継される。犠牲者たちは初めて自分たちの胸の中にしまっていた傷をさらけ出しました。よくあったのが、涙を流して証言が止まってしまう、しかし無理やり話をさせようとはしないで、しばらく落ち着くまで待つ。そうすると、テレビやラジオでは沈黙が続く、その沈黙の時間を共有しながら全国の人々が証言に耳を傾ける。これは被害者にとって、ある程度までは、心理的な癒しのプロセスになったことでしょう。

二番目は、免責です。これは何かというと、人権侵害の加害者は、すべてを正直に告白した場合に限って、免責を受けることができる。逆に言うと、虚偽の発言をした者は、通常の刑事告発を受けるかもしれないということになる。いろいろなことが明らかになって、自分はもう逃げられないと思う加害者がいるかもしれません。白人の警察官が、「はい、やりました。しかし私ひとりでやったものではありません。私と一緒にこの黒人青年の首を絞めたのはあいつです」と言います。そうすると、指差された同僚は、「はい、確かにやりました。しかし私たちに命令したのは警察署長です」と言うのです。そうすると、指差された警察署長も何かを言わなければならなくなる。芋づる式に証言が出てくるのです。嘘の証言をすると刑事罰の対象になります。これは、行方不明事件などに関して非常に大きな効果がありました。20年、30年ぶりにその現場を掘り返してみたら、確かに白骨死体が埋まっていた。年老いた母親が変わり果てた息子の姿と対面するといったケースが、南アフリカのあちこちで見られました。

三番目が補償ですね。政治暴力の被害者とその家族は、被害の程度に応じて補償金を受け取る。額は大きかったとは思いますが、自分達が無駄に命を落としたわけではない、自分の子供や夫や妻が無駄に命を落としたわけではないことを政府が正式に認めて補償するわけですから、シンボリックな意味もあると思います。

TRCの活動は現在終了し、アパルトヘイトの下で行われた政治暴力は克明に記録され、インターネットからも報告書にアクセスすることができます。百科事典5巻の分厚さです。公聴会などの映像記録は国営放送に保管されているようです。しかし、あれ程の罪を犯した人達がどうして処罰されないんだ、という感覚が強く残っているのも事実だと思います。TRCは南アフリカが初めてではなく、エルサルバドルとかチリとか、特にラテンアメリカで80年代に軍政を経験したところで、同様の真実和解委員会が開かれました。南アフリカはそれを参考にしながら、いくつか制度を変えて、かなり大規模に実施した例だと思います。新しい南アフリカが誕生するにあたって、過去にけじめをつけるという非常に大きな役割を果たしました。

今の南アフリカはいろいろ問題はあるけれども、これまで25年間、個人として南アフリカを見てきて、全体としては、20世紀末の体制転換はとてもうまくいったと思います。少なくとも全面的な内戦に陥らずに済んだ。歴史的にはいろいろな可能性が開かれていたと思うのですが、アパルトヘイトから脱出するにあたって南アフリカが主体的に選んだ道として、可能な選択肢のなかではベストに近い道だったと思います。

それでも、現在の南アフリカには非常に大きな問題があります。治安の問題もありますし、それからHIV/エイズの問題もあります。貧富の格差も大問題です。新体制が成立したあと、黒人のお金持ちが生まれました。公共セクター、民間セクターでも、新しいブラックミドルクラスがそれなりに成長してきました。ところが、黒人の半分から3分の2の人々は、新体制の下で恩恵を受けることができない。黒人の居住区に行くと、およそ4割は失業者です。このフラストレーションが、犯罪が広がる温床となります。確かに、昔のような形での人種隔離はなくなったけれども、そのかわりに黒人の階層分解が進行しています。勝ち組、負け組が分かれ、黒人の中でも、新しい開放的な経済成長の果実にアクセスできない人々が、相当の数取り残されている。これが今の南アフリカ一番大きな問題だと思います。

そういう問題はありますけれども、南アフリカの歴史の現実在即して、あるいは他の紛争地域にどういう形でこの教訓を生かせるのかということを含めて、みなさんでも議論をしていただきたいと思います。

(質問)

- ① 真実和解委員会について、南アフリカの真実和解委員会では基本的にどこまで免責というものが認められるのか。実行犯の責任をどこまで問えるのか。
- ② 移行期の政府について、アパルトヘイト崩壊後というのはいわば産みの苦しみの苦しみだったのだろう。90年にアパルトヘイトが撤廃され、94年に選挙がおこなわれるまでの4年間の内戦を和らげるために、民主化を押し付けるような形ではなく南アフリカの下からの体制を作り上げる上で、国際社会としての国連が果たせる役割はもっとあったのではないか。
- ③ 真実和解委員会について、罪を犯した者達がなぜ処罰されないのか。実際に公の場で、まわりの人達が許せないからリンチをおこなうというような、自分たちで処罰をするような混乱は起こらなかったのか。
- ④ 南アフリカの経済の現状について具体的にお聞かせ下さい。

(講師)

- ① まず TRC の話ですが、免責といってもいったいどこまでという話ですが、実態は不十分なものです。本来なら、国民党時代の最高責任者がアパルトヘイト時代の人権侵害の責任を取るべきでしょう。最も弾圧が激しかった1980年代の大統領は P.W.ボタという人ですが、いろいろな証言を集めていくと、そこまで責任が上がっていくのです。最終的に、ボタ元大統領には本質的なところで政治暴力に関する責任があるということは明らかです。しかし、この元大統領は TRC のプロセスに参加することを拒否しました。それは何を意味するかというと、南アフリカの検察当局は彼を起訴してもよいのですが、その起訴が、調査中ということで無限に引き伸ばされているのわけです。これはある意味で、新政権にとってのカードでもあります。訴追プロセスに入ろうと思えばできてしまうということなのです。ただ、これには逆もありまして、ANC 解放運動の側でも亡命先での拷問などの実態が十分に明らかにされていないということがあります。これも、検察側が問題にしようとしたらできてしまう。いわば両者痛みわけで、道義的には「あいつらが悪かった」ということが社会的に共有されながらも、幅広い起訴はされていないというのが南アの現状です。
- ② 南アの移行期、産みの苦しみの時に、国連を含めて国際社会がどういう形で関与したのかと言いますと、実は、南アフリカのケースに国連はずっと前から関与してきました。「中立」というのではなく、ANC の側を意識的に「えこひいき」する形なのですが、1970、80年代にかけて、アパルトヘイトは人間性に対する犯罪である、悪であるという価値判断が、当然のことですが、国際社会の常識になっていた。国連には反アパルトヘイト委員会が設置され、ANC や PAC といった組織が南アフリカの多数派黒人の代表であることを国際社会が承認していたわけです。そして、国民党政権を孤立させるための制裁を、国連が呼びかけていた。状況が変わったのは、ANC が合法化されて、国民党と対等な交渉の段階に入ってしまったからです。基本的には、南アフリカ人が自分達で決めることであるということで、国際社会はスッと身を引くというかたちになった。当事者の交渉が始まった以上、任せるしかないわけです。しかし、すべての出発点はアパルトヘイトの撤廃であり、それを実現させるにあたって、国際社会とりわけ国連の役割は非常に大きかったといえます。
- ③ これだけの罪を犯しておいて免責となると、プライベートな仕返しがあるのではないかとありますが、私はあまり聞いたことがありません。一つには、白人と黒人の生活圏は大きく隔たっていて、雇用関係がない限り大きなつながりはない、ということがあります。アパルトヘイト撤廃後も両者は別世界であって、黒人がわざわざ白人の家に行って恨みを晴らすというようなケースは、ほとんどない。他方では、解放運動に関与した人々の人生のコースも、いろいろあるということを感じます。今頃は大学を出て立派に生活しているはずの一人息子がいたけれど、ANC の活動に関与して

殺害されてしまったばかりに、未来がなくなってしまった母親がいます。ANCにも立派な方はいらっしゃいますが、勝ち馬に乗る形で体制変革の後に黨員になった有力者もいますし、出世して高級車を乗り回す人もいます。成り上がっていくかつての同志を横目で見ながら、貧しい人々の中で淡々と働き続けているヒラのANC活動家もいます。地道な職業訓練などのプロジェクトもありますし、何の見返りも求めずにコミュニティに入っていき新しい世代の若者達も結構います。こういう人々の存在があるので、南アフリカにいつも勇気づけられます。そのあたりが南アフリカの懐の深さ、温かさを感じるどころです。

- ④経済の現状については、話をすればきりがありませんが、南アフリカは基本的には豊かな国です。下支えは鉱業です。国際収支が赤字になりそうでも、資源輸出で帳尻を合わせることができます。他方では製造業もアフリカ最大の拠点になっており、トヨタなども大きな工場を持っています。カーラなどを世界水準の品質で作って輸出しています。アパルトヘイトの障壁が取り払われたことで、南アフリカでは製造業、流通業、観光業なども勢いづいています。南アそのものは賃金水準が高いので、資本が外に出て行く傾向もあります。南アフリカの周辺諸国だけでなく、東アフリカや西アフリカでも、南ア資本が地元企業を買収している、ショッピングセンターに行くと南アの商品ばかりだ、南アの企業は他のアフリカ諸国の庶民が貯めた金を吸い取っている、と批判されることがあります。このように風当たりは強いですが、アフリカ大陸が海外投資を呼び込むにあたって、外部世界とアフリカを結ぶ窓口として、南アフリカの価値が高くなっているということはあるでしょう。次はサッカーのワールドカップが開催されますし、その経済的な波及効果にも注目したいと思います。グローバル化の波に乗って、南アフリカの経済は基本的に好調なのですが、なかなか雇用が増えないことが大問題です。勝ち組と負け組の格差が広がるというのは世界的な現象ですが、南アフリカについては、アパルトヘイトが撤廃された後に格差が広がるとは、誰も想像していませんでした。しかし、それが現実です。